

修験道の山の風景計画 - 羽黒山の杉並木の事例

○上田 裕文*

1. はじめに一羽黒山の杉並木における風景の課題

樹齢300年を超える羽黒山の杉並木は、修験道の舞台として長い歴史を持つ象徴的な空間であるとともに、国の特別天然記念物にも指定され、毎年多くの人々が訪れる観光資源でもある。しかし、老木となった杉並木は、近年の台風被害などが相次ぎ、当初585本が指定された特別天然記念物のスギは現在400本以下に減少し、今後の管理方針について検討すべき時期を迎えている。

そこで本研究では、① 信仰や生活を通して利用されている杉並木の望ましい姿を明らかにし、② 他地域の杉並木保全の事例を参考にしつつ、③ 将来の保存活用方法について検討することとした。

(1) 文化財としての課題

羽黒山の杉並木は昭和26年に国の天然記念物に指定され、さらに昭和30年に特別天然記念物として指定された貴重な文化財である。その指定理由は、「樹齢300年以上を経た巨杉がならび、その樹勢が極めて旺盛である」こととされている。つまり、杉並木の文化財としての価値は、その樹勢の旺盛な巨杉であり、近年増加する倒木被害は、この文化財としての価値を著しく毀損していることを意味している。そのため、杉並木の文化財としての価値を維持するには、杉を健全な状態で維持することが求められる。しかしながら、樹木は成長するだけでなく、いつか必ず枯れる。森林もまた時間とともに遷移し、自然の中で同じ姿をとどめていない。樹木としての杉並木を永遠に維持することは不可能であり、現在文化財として指定されている巨杉は、今後もその数を減少させていくことが予想される。それに伴い、杉並木を含む森林景観も、杉の代わりに広葉樹が優勢となり、次第に混交林から広葉樹林へと遷移していくことが予想される。文化財として杉並木を維持するには、杉の後継樹を育てていくとともに、それを可能にする森林を人の手を加え整備していくことが求められる。

(2) 地域づくりとしての課題

羽黒山の杉並木は、文化財であるだけでなく、地域で生活する人々の象徴的な景観であり、信仰や生活、観光を通して活用される公共性の高い空間でもある。こうした地域資源としての杉並木は、必ずしも「樹勢の旺盛な巨杉」の保存のみが地域にとっての目的ではなく、信仰や生活、観光における地域資源としての活用が求められる。逆を言うと、地域資源としての杉並木は、必ずしも樹勢の旺盛な巨杉のみの保存ではなく、杉並木を含む羽黒山

*北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

の森林、出羽三山神社の境内空間、さらには出羽三山の地域景観を対象とした地域づくりの中で捉えられる必要がある。この時の杉並木の価値は、さまざまな立場の人のさまざまな視点から捉えられるものであり、地域づくりの中ではこうした価値に関する相互理解と合意形成が求められる。つまり、地域の将来像における杉並木の持つ役割を再度見直し、今後の保存活用について検討することが求められる。

2. 杉並木の景観認識に対する住民アンケート調査

信仰や生活を通して利用されている杉並木の望ましい姿を明らかにするため、山形県鶴岡市手向（とうげ）地区の住民を対象に、アンケート調査を行った。調査期間は2021年11月15日～30日で、全360世帯に2部ずつアンケートを配布し、199部の回答のうち有効回答190部を分析対象とした。

アンケート調査では、杉並木の将来的な変化をフォトモンタージュを用いた2種類のシミュレーション画像をして用意し、今後の杉並木の変化として望ましい将来像を尋ねた。一つ目の画像は将来的に広葉樹が侵入し、次第にブナ林へと遷移していく「広葉樹林化」シナリオである。二つ目は再び杉の苗木を補植し、下草や低木も刈り払いながら管理をつづける、「杉並木並木再生」シナリオである。それぞれの景観変化に関する印象についても、現状の景観に対する印象とともにSD法を用いて尋ねた。

その結果、65%の回答者が二つ目の「杉並木再生」の将来像を選んだ。そして、その印象評価に関するSD法の結果を見ると、「杉並木再生」シナリオの印象が、「現状」の印象と類似しながらも若干異なっている点が明らかになった。その要因は、現状の杉並木にすでに広葉樹が混ざっていることに由来していると考えられる。杉のみからなる

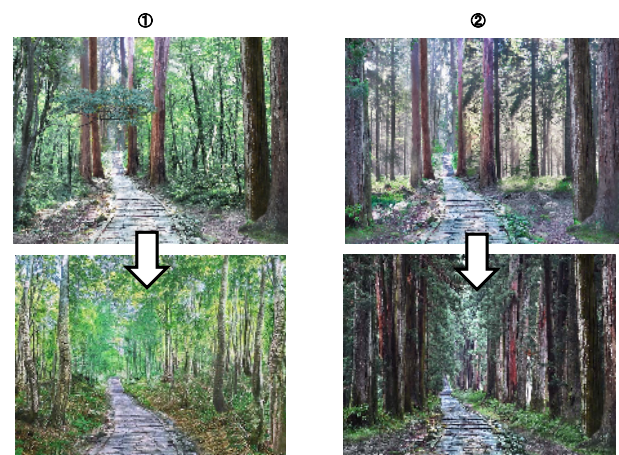


図-1 「広葉樹林化」(左)と「杉並木再生」(右)シナリオのシミュレーション画像

「杉並木再生」のシミュレーション画像では、広葉樹が混ざっている「現状」の杉並木よりも、「単調な」「うっとろしい」「暗い」「親しみにくい」といった印象が強くなる。このことは、人々にとって、杉の巨木と広葉樹の低木が混ざった現状の杉並木の景観の方がより好ましいと考えられていることを示唆していて大変興味深い。

3. 他地域事例の視察調査

文化財としての杉並木の保存活用を行う先事例として、日光杉並木街道と戸隠神社奥社の杜を選定し視察調査を行った。

(1) 日光杉並木街道

日光杉並木街道は、羽黒山の杉並木と並び、国指定特別天然記念物の杉並木である。総延長は30kmを超え、並木杉の数は12,000本を超える規模の大きさから、関係機関が多くしくみも複雑である。国道の土地は国の所有、地上の樹木は日光東照宮の所有、文化財管理団体は栃木県であり、この三者が連携して管理を行っている。

令和元年(2019)に「日光杉並木街道保存活用計画」を県が主導して策定しており、それに先んじて毎木調査が実施された。天然記念物指定木を改めて確認するとともに、倒木の可能性度合いについても5段階で評価し、倒木未然防止策としてワイヤー架けなどが行われている。

保存活用計画の方針は一言で表すと「街道復元」であり、並木道を江戸時代の姿に戻すことである点が特徴的である。杉並木の理想像は、杉のみによる並木道であり、そのために昭和の早い段階から杉の苗木の補植が行われてきた。こうした活動を支える「杉の並木守」というボランティア制度だけでなく、杉の木1本につき1000万円で里親になってもらう「日光杉並木オーナー制度」といった、地域資源を活用した資金調達の画期的なアイデアが見られる。

(2) 戸隠神社奥社の杜

戸隠神社奥社の杜は長野県指定の天然記念物で、市民団体が中心となって植生調査や樹木調査を行いながら保存活用計画の準備を進めている地域である。

奥社の杜は、総延長約500mで戸隠神社所有の土地であるため、日光杉並木街道のように関係機関の複雑な調整はない。その意味で、出羽三山神社所有の杉並木と同じ条件である。羽黒山の杉並木と異なるのは、出羽三山神社では参道から左右8m幅に含まれる巨杉が特別天然記念物にしているのに対して、戸隠神社では参道から左右50m幅のエリアが天然記念物に指定されている点である。そのため、文化財としての本質的価値をどのように解釈し、目指すべき景観の将来像をどのように定めるかについての慎重な検

討が必要とされている。こうした背景から、平成21年に結成された「戸隠奥社の杜と杉並木を守る会」を中心に、5年ごとに直径5cm以上のすべての樹種の毎木調査が行われている。定期的な調査結果を蓄積させてモニタリングを行うことで、奥社の杜の動態的な変化にきめ細やかに対応していくという基本姿勢が見られる。一方で、戸隠奥社の杉並木は、整然とした杉の形態が特徴的で、これらは当時同一遺伝子を持つクローン杉が植えられたことに由来している。守る会では、並木杉の遺伝子調査を行い、クローン苗木を用いた補植も実験的に開始している。さらに、巨木に対しては樹木医による音響波診断や、地下の根の試掘調査なども行われ、社殿に隣接する境内の巨杉に関しては、コブラロープを用いた危険木対策がとられていた。

4. 将来の保存活用の方向性

羽黒山の杉並木の現状と、2箇所の視察調査の結果を踏まえると、今後の課題は大きく分けて2つに整理できる。それは、短期的視点での巨杉の危険木対策と、中長期的な森林としての保全管理である。

短期的な視点での巨杉の危険木対策については、すでに行われている樹木医診断に加え、特別天然記念物指定木についてのナンバリングや樹木分布図の作成といった基礎情報の整理が必要であると考えられる。すでに危険木として樹木医の判定を受けている樹木については、速やかにワイヤー架けやコブラロープといった方法による未然防止策が神社によって講じられることとなった。また、参道から左右8m幅に含まれる杉のナンバリング調査を行い、実生や小径木を含め558本が確認された。

中長期的な森林としての保全管理について、出羽三山神社でも「文化財保存活用計画」の作成を検討することとなった。令和4年度中に山形県の「文化財保存活用大綱」が策定され、それに続いて鶴岡市においても「文化財保存活用地域計画」の作成が予定されている。今後は、所有者である出羽三山神社と鶴岡市が連携して、「文化財保存活用計画」に向けて準備をする中で、①目指すべき方向性や将来像を定め、②その実現に向けた管理方法を検討し、それと同時に③主体間の連携による活動を推進する体制づくり、④持続的な管理を可能にする財源確保の仕組みづくりについて具体的に検討していく必要がある。その際には、手向地区のまちづくりとも連携し、地域全体での地域づくりの視点から、環境的、社会的、文化的な持続性を意識する必要があるだろう。

補注及び引用文献

- 1) 高橋教夫・菅野智美・野堀嘉裕(2006): 針広混交林の景観評価における混交型・混交率の影響: 森林計画 40(2), 191-201